

令和6年度 加賀看護学校 学校評価結果

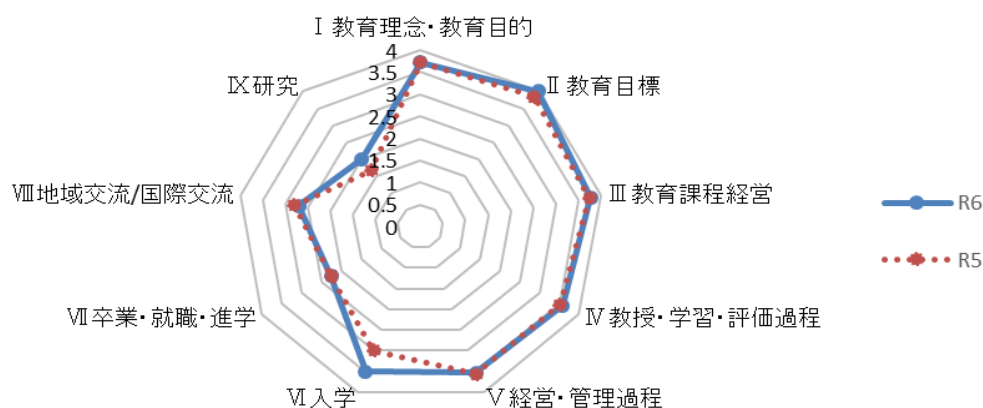
1. 評価内容

I	教育理念・教育目的	5項目
II	教育目標	5項目
III	教育課程経営	15項目
IV	教授・学習・評価過程	12項目
V	経営・管理過程	14項目
VI	入学	2項目
VII	卒業・就職・進学	4項目
VIII	地域交流/国際交流	7項目
IX	研究	3項目
計		67項目

2. 評価の基準

4 当てはまる 3 やや当てはまる 2 やや当てはまらない 1 当てはまらない

3. 評価結果



4. カテゴリーごとの自己評価の概要

カテゴリー	評価点	評価
I 教育理念・教育目的	3.727	❖学校の教育理念・目的・目標は、地域社会に貢献できる質の高い看護師養成を保障するものであり、学生便覧、シラバス、実習要項、学校案内に記載している。アドミッションポリシーも明文化し、ホームページに公表した。これらの内容は学生の学習の指針として、また教職員の教育の指針となっている。 ❖看護学教育や学生観について明文化したものが無いため検討する必要がある。
II 教育目標	4	❖教育目標は、教育理念・目的と一貫性があり、教育内容を網羅したものとなっている。ディプロマポリシーに主体的な学習・自己研鑽を示した上で、卒業後も自己研鑽し続ける能力の育成を目標に掲げており、キャリアパスを視野に入れた講義も取り入れている。
III 教育課程経営	3.774	❖教育課程は教育理念・目的・目標から考えられており、学科進度・科目・単元の考え方もシラバスに明文化されている。 ❖令和6年度も数人、コロナ感染で出席停止などがあったが、講義や臨地実習において学習が不利にならないように調整し、計画通りにカリキュラムを遂行することができた。 ❖教育課程評価の体系においては、学生による授業評価が定着してきており、全ての講師に実施している。授業評価実施要領を定めて運用している。 ❖教員の科目分担は偏りなく配分されているが、育休による欠員があり1人あたりの業務負担が増大している。授業準備に十分な時間がとれていないため、業務改善の工夫が必要である。 ❖臨地実習については、定期的の実習指導者会議を開催し実習指導体制、学生の安全教育・安全確保について十分に話し合いながら学生指導にあたっている。全学年が新カリキュラムとなり、臨地実習施設も増えたが、その都度指導担当者と教員とで密に連携をとり調整しながら進めることができた。また実習指導者と病棟スタッフの連携もあり、病棟全体で学生を支援してくれている。 ❖ケアの対象者の権利の尊重について明文化されたものが無いため、今後整備していく必要がある。

カテゴリー	評価点	評価
IV 教授・学習・ 評価過程	3.588	❖教育内容は、教育理念・目的・目標と一貫性をもち、科目目標・単元目標、科目間の関連性、評価方法はシラバスに明示している。シラバスは、学生の学習への動機づけとなるよう整備されている。 ❖授業の展開では、シラバスに沿い学生の学習が深化するよう授業方法を選択している。授業時間外に授業内容や技術についての質問ができるように伝えているため、学生は積極的に質問やアドバイスをもらいに来ている。具体的な授業方略や評価計画は担当講師に一任しているが、科目の評価結果の妥当性を学校で検討し担当講師や教員と話し合うことで次年度の授業改善につながっている。
V 経営・管理過程	3.528	❖学校長及び事務局長が病院との兼務であるが、職員会議等で管理者の考えを確認しながら、連携して学校運営にあたっている。組織体制は学則等に明示されており、職務分掌に沿って各々の役割を果たしている。 ❖産休育休中の職員がいるが役割を補完し合う体制をとり、また教員の新規採用についても計画的に進めている。 ❖財政基盤は大部分が市の一般財源となっている。必要な教材は計画どおりに整備し適正な予算執行ができています。しかし、退学者の増加と入学志願者の減少に伴う財源への影響および総定員維持に向けた教職員の意識改革が課題である。 ❖学校施設は、老朽化ならびに能登半島地震による被害がみられるため、段階的に修繕を進めている。限られた敷地と老朽化した設備のため、福利厚生において十分とは言えず、学生に不便をかけている。その中でも令和6年度は、全トイレを洋式化したり近隣施設を利用して学習環境を整えるなど、学生生活の快適性の向上に取り組んだ。しかしカウンセラーが未整備のままとなっており課題である。 ❖広報活動として、従来の活動に加え、近隣の高校訪問強化、オープンスクール内容の見直し、町内会を通じたパンフレット配布、デジタルサイネージ掲載、情報誌を通じた学校の話題発信、インスタグラムの開始など、新たな取り組みに数多く着手し、学校のPRIに務めた。 ❖自己点検・自己評価は規定に基づき実施できている。
VI 入学	3.5	❖受験者数の減少傾向に対し入学選抜様式を変更し、受験対象者を細分化、それに伴い試験科目を縮小、入試回数を増加した。社会人入試と一般入試の受験者は増加したが推薦入試は激減した。今後は社会人を対象とした情報発信を強化し、社会人受験者増につなげる。
VII 卒業・就職・ 進学	2.25	❖卒業時の到達度は、看護技術経験状況と看護の統合と実践におけるOSCEで把握している。国家試験合格率は全国平均とほぼ同じであった。近年の多様な学力・人間力の学生に対し、どのように教育指導していくか今後検討が必要である。 ❖国家試験合格の卒業生の加賀市内医療機関への就職率は59.1%（前年42.3%）であり、「地域社会に貢献できる人材育成」の教育理念に合致している。 ❖入学から卒業までの学生数の変動、ならびに卒業後の動向の分析等が課題である。
VIII 地域社会・国 際交流	2.7	❖令和6年度はボランティア活動に力を入れ、医療施設や福祉団体等と連絡を取り合いって能登震災・水害ボランティア等に積極的に参加できるようにした。看護の行事に参加したり高校からの要請を受けたりして、進路相談や職業説明会、職業体験授業を行っている。また授業の一環として、地域理解のためにフィールドワークを行ったり加賀市の総合防災訓練参加したりすることで、地域の特徴やニーズを把握することにつながっている。 ❖国際的視野を広げるため、授業の一環として近隣の外国人留学生と交流し、文化の異なる対象を理解するとともに、日本で生活する留学生の医療に関する困難について情報を得る機会を設定した。しかし国際的視野を広げるための自己学習環境、海外からの留学生の受け入れ体制については整備できていない。
IX 研究	2	❖研究者に対し相談役を設けることでフォローアップ体制を整え、看護研究に着手し段階的に取り組んでいる。研究の素地となる学会には各自が積極的に参加している。 ❖研究協力の依頼に関しては積極的に協力している。

5. 関係者評価

概ね自己評価は妥当であると評価した。以下のような意見、課題・改善点を示す。

❖学生指導や生活指導を実施しながら授業の教材研究を行うことは難しいのではないかと。授業準備のための時間確保が苦勞するところである。

❖実習施設に対し実習学生のヒヤリハットについて意識して関わるよう学校から依頼されたことで、受け入れる側も実習指導体制について再考する機会となっており、よい取り組みだと考える。

❖学生の看護実践体験の保障について、受け入れる病棟でも指導スタッフの調整やフォロー体制等の工夫が必要である。

❖学生が実習体験できるよう、実習施設の状況に応じて学校も柔軟に指導体制を変えていかなければ、学びの機会を逃すことになってしまう。実習施設と学校とで連携をとりながら、学生の学びに不利益がないよう考えていくとよい。

❖教育の目的の共有、授業内容の検討、学生指導の方向性の確認など、組織内でダイアログする機会を設けることで、教育活動を深めることにつながる。

❖地域の医療機関で活躍する看護師を育成するためには、市内在住の人の認知度アップを図る必要がある。社会人の人にも学校の存在が周知されるような取り組みが今後必要であろう。

❖看護学生自身が「地域看護を担う人材」についての探求学習を取り入れてはどうか。若い人や社会人経験者の当事者の声を取り上げて発信できるとよい。授業に取り入れると効果的だと考える。またホームページやInstagramについても、ほかの学校と似たような内容ではなく、本校の存在をもっとアピールできるような相手に響く工夫を取り入れる方がよい。

❖看護師の魅力を低学年の時から知ってもらうことで看護の道に進む学生を増やすために、地域の小学校と看護学校とがコラボして活動する機会を設けることも効果的である。

❖看護研究がすすまないのであれば、まずは学会発表の敷居を低くし、日ごろ実践している取り組みについて発表することから始める。